翻　　訳

フランス義務教育課程第二学習期の学習指導要領（フランス語）[1]

飯　田　伸　二

以下に読まれる文章は，2018年７月16日付『フランス国民教育省官報』第30号に公布され，同年新学期より施行されている「第２学習期学習指導要領」のフランス語に関連する箇所の日本語訳である[2]。具体的には，第２学習期全体のあり方を規定する第１部，第２部の全文，および第２学習期のフランス語教育にかかわる第３部「科目教育」の「フランス語」全文である。第１部，第２部からは，義務教育課程，とりわけ初等教育前半（小学校１～３年）のあり方に対するフランス文部行政の問題意識を検証・考察するうえで重要な情報・知見が得られるはずである。第２学習期３年間のフランス語教育の詳細については第３部を参照願いたい。あえて，フランス語教育に関連する箇所全文を翻訳したのは，義務教育，フランス語教育に対する今日のフランス行政の問題意識を総合的に理解するだけでなく，個々の施策からは場合によっては認識しづらい根本的な哲学・理念を感得するには，指導要領全体の通読は避けられないと判断したからである。指導要領の分析については，第３・第４学習期指導要領の翻訳を終えた後に取り組む予定である。

この指導要領の母体となったのは2015年11月26日付『フランス国民教育省官報』特別号第11号に発表された「第２・第３・第４学習期指導要領」である。この指導要領に基づき，2016年度から学年ごとの学習指導要領に代わり，学習期ごとの学習指導要領が実施されている。抜本的な見直しではないものの，わずか２年で学習指導要領が改訂されることは異例のことである。この背景には，2016年度から施行されたコレージュ改革に批判的であったエマニュエル・マクロンのフランス共和国大統領就任（2017年５月）があることは論を待つまい。これは，同大統領が首相に任命したエドゥアール・フィリップ内閣において，サルコジ大統領下の2009年から2012年まで学校教育局長として，教育行政の中枢を担っていたジャン＝ミシェル・ブランケールを国民教育相に任命した人事からも明らかであろう。

また，学習指導要領のあり方，方向性は2015年３月31日付政令（デクレ）として公布された「知識・技能・教養からなる共通基盤」によって規定されている。この文章の日本語訳としては拙訳が存在する[3]。また，フランスで学年ごとの学習指導要領作成を放棄し，３学年からなる学習期ごとの学習指導要領を採用した経緯・理由については，かつて分析を試みた。必要に応じ，参照願えれば幸甚である[4]。

キーワード：フランス義務教育，国語，フランス語，学習指導要領

[1] 本稿は2018年度科学研究費助成事業（研究種目：基盤研究Ｃ；研究代表者：飯田伸二；課題番号：18K02600；研究課題：フランスにおけるコレージュ改革の射程と実効性：国語教育の再編を中心に）の研究成果の一部である。

[2] 今回，翻訳に使用したテクストは，フランス国民教育省が運営する教育関係者支援サイト「エデュスコール」からダウンロード可能である。« https://cache.media.eduscol.education.fr/file/programmes_2018/20/0/Cycle_2_programme_consolide_1038200.pdf » (accédé le 24 mai 2019).

[3] 飯田伸二「《翻訳》「知識・技能・教養からなる共通基盤」」，『Stella』（九州大学フランス語フランス文学研究会），37号，2018年，19-42頁。

[4] 飯田伸二「2016年のコレージュ改革：学級と科目の脱構築に向けて」，『国際文化学部論集』（鹿児島国際大学国際文化学部），第17巻第３号，2016年，141-156頁。

《翻訳》

第２学習期

第１部：基本学習期固有の特徴（第２学習期）

学校で学ぶとは，世界に問いかけることである。それはまたな特殊な言語（ランガージュ）を獲得することでもある。これらの言語（ランガージュ）を獲得するには，単なる身体的成長では不十分である。第２学習期は，小学校１年から小学校３年にまたがる[5]。すなわち，段階的で，妥協のない学習のための十分な時間と一貫性が準備されている。第２学習期ではすべての授業科目が世界に問いかける。多様な言語（ランガージュ）の習得，特にフランス語の習得が優先事項である。

第２学習期では，基礎的な知（読むこと，書くこと，数えること，他者を尊重すること）の獲得が優先事項である。授業はとりわけ構成がしっかりしており，かつ明示的でなければならない。重要なのは学びに意味を与えることである。しかし，同じく重要なのは，学びを進度とともに計画することだ。第２学習期に進級する子供たちの間には互いに大きな違いがある。彼らはさまざまな家庭環境・学校状況のもとで成長し，学んできた。これら多様な環境・状況は児童の学び・〔生活・学習〕[6]リズムに強く影響する。そのため，教室での授業は，知識の振り返りを絶えず行うことが中心となる。児童は一緒に学びはするものの，学習は段階的で，個々のリズムに合わせて行われる。一部の児童（母語が外国語でごく最近フランスに来た児童，障害を抱えている児童，書きことばに取り組むのに重大な困難を感じている児童，ごく最近就学した児童等）に欠かせない，特別な教育的必要を考慮するためである。これらの児童は，指導法について適切な教育上の配慮を必要としている。

第２学習期では，意味と無意識化が同時に形成される。児童が再利用できるような堅固な知の錬成には理解が不可欠である。技量の一部を無意識ですることは認知力を自由に行使する手段である。そうすると，児童はより複雑な作業〔opérations〕や理解ができるようになる。これにはすべての授業科目がかかわっている。たとえば，数学においてさまざまな計算を理解することは，児童が再利用する〔計算にかかわる〕知の錬成に不可欠である。同時に，即座に利用可能な知識（たとえば，九九表の計算結果）を児童が有していると，自分は何をしているのか，何故こんなことをしているのかを理解しておく必要のある「知的計算」を解く能力が大幅に改善する。世界への問いかけ[7]においても，時間の目印の構築は同じ論理に対応する。明快な学習に関連する時間的な目安を構築しておくと，徐々にそれらを無意識のうちに使うことができるようになる。

第２学習期では，フランス語が学びの中心的な対象である。無意識化できることと意味を構築することは，言語（ランゲ）の習得に必要な二つの側面である。文字あるいは文字の組み合わせから音，そしてその逆の対応全体を習得することは，フランス語学習の本質的な狙いである。小学１年で流暢な音

---

[5] 日本語の小学１年はフランス語ではCP（= cours préparatoire），すなわち「準備課程」という名称である。また小学２・３年はそれぞれCE1（= cours élémentaire 1ère année），CE2（= cours élémentaire 2e année）すなわち「初等課程１年」「初等課程２年」となる。

[6] 翻訳本文中，亀甲括弧〔〕は，本文理解のために筆者の判断で加筆した箇所を示す。

[7] 「世界への問いかけ〔Questionner le monde〕」は第２学習期に設置されている科目の一つ。この科目は，第３学習期に入ると「理科」と「地理と歴史」に分けられる。

読ができるようになる必要があるのは，それが文章をよく理解するための必須条件だからである。読むことの練習は常に書くことと連携して行われる。そして段階的に，語彙，文法，つづり字と連携しながら実施される。

言語（ランゲ）はあらゆる学習に役立つ道具である。教員が複数科目を担当しているので，あらゆる学習領域を交差させ，定期的に基本学習に立ち戻ることができる。児童が見学・実験・研究の報告をすることにより，児童はメッセージの実際の受取人を想定したコミュニケーションの道具としてフランス語を使用する —— まず話しことばで，その後は書きことばで —— プロジェクトを練ることができる。

第２学習期では，具体的なものと抽象的なものが絶えず関連づけられる。観察すること，行動すること，操作すること，実験すること，これらすべての活動は，類推的（スケッチ，イメージ，図式化）であれ，象徴的であれ，抽象的（数，概念）であれ表象にたどり着く。

第２学習期では，話しことばと書きことばには大きなズレがある。児童が話しことばで理解できること・表現できることは，書きことばで理解できること・表現できることよりも一段階高いレベルにある。しかし，話しことばと書きことばは結びついている。そして，児童は小学１年から早くも，さまざまな文章を書き，読む。話しことばと書きことばとの隔たりは現用語〔外国語もしくは地域語〕の学習においてとりわけ大きい。第２学習期は，まず話しことばにおいて，数々の言語（ランゲ）での児童の技能を育成するための目安の設定に貢献する。外国語にせよ地域語にせよ，現用語の授業・学習では，学習言語（ランゲ）を駆使する立場，そして，その言語（ランゲ）について考える立場に児童を立たせなければならない。言語（ランゲ）の練習は，文化についての勉学と切り離すことはできない。

第２学習期では，直感的な知識がまだ中心的な位置を占めている。学校の外部で，家庭やその他の場所で，子供たちは多くの領域における知識を獲得している。例えば社会（規則，約束事，慣習），身体（自身の肉体，運動に関する知識），話しことば，そして文化の領域における知識である。こうした知識は学習の基礎〔作り〕に貢献する。学びの時間において，児童は自分が何を知っていて，何ができるのかを理解し，自身の考察を利用することが奨励される。

第２学習期では，学びの基本活動ができるように教えられる。基本活動は数々の授業で行われ，また就学期間を通じて行われる。すなわち，問題を解く，資料を理解する，文章を書く，ものを作り・考案する，などの活動である。学校におけるこれらさまざまな活動の関連については，教員が明確に説明する。学習対象（例えば，数学の問題を解く／理科において手順を踏んで研究を行う／フランス語で文章を理解し解釈する／美術において作品を鑑賞する）間の類似点を強調し，その共通点と相違点を明らかにするのは教員の役目である。

第２学習期では，合理的な根拠付けができるようになる。ある活動をしている児童は，その活動を実行できる。同じく，何故，そしてどのように実行したのかを説明できる。児童は自身の応答と考え方を根拠づけることができるようになる。これにより，児童は自身がしたことを疑い，批判することができる。また同じく，自身あるいは他者がしたことを評価できる。

メディア・情報教育は判断力行使の基礎を作り，批判精神を育成する。

第2部

各授業科目から〔知識・技能・教養からなる〕共通基盤への主要な貢献[8]

領域1 考え，コミニュケーションするための言語（ランガージュ）
話しことばと書きことばの両方でフランス語を使って理解・表現する 第2学習期では，フランス語の学習は話しことば，そして読むこと，書くことを通じて行われる。話しことばでの自在さを獲得し，〔メッセージを〕受信することによって書きことばに触れ，フランス語を書けるようになるには，言語（ランガ）の仕組みを学ぶことが必要である。そうすることによって，行き届いた発言ができる。平易で，まとまりがあり，的確に句読点が打たれた文章を書けるようになる。そして，徐々に文章を複雑にできる。さらに，つづり字にも注意が及ぶようになる。 あらゆる授業はフランス語の習得に寄与する。しかしながら，世界への問いかけ，美術，音楽は，自然現象，多様な形態・世界観に関心を抱くよう誘う。そうすることによって，これらの授業は，自然現象・形態・世界観を記述・比較する機会を提供する。同じく，固有の表現形態・語彙を話しことばと書きことばで使いこなす機会を提供する。 **外国語を使って，そして必要に応じて地域語を使って理解・表現する** 第2学習期は外国語・地域語学習の出発点である。この学習により，児童は話しことばでヨーロッパ言語共通参照枠（CERL[9]）の言語技能A1レベル（聞く / 会話に参加する / 話しことばで詰まらずに表現する ）を獲得できるはずである。 フランス語では，教室で学ぶ現用外国語と比較対照すること，すなわち，折に触れ，単語・語順・発音についてフランス語と比較することにより，言語システムとはどのようなものであるかをよりよく定着させることができる。文学との出会いもまた，フランス語同様，外国語あるいは地域語を使って（バイリンガルの絵本など），文化的な学習にしかるべき重要性を与える方法である。他の幾つかの科目，特に音楽，体育・スポーツは，児童の関心を文化的方面に向けることことができる。 **数学・科学・情報科学言語（ランガージュ）を使って理解・表現する** 数学は，例えば数え方の仕組みを理解すること，計算すること，大きさを知ることによって，科学言語（ランガージュ）の獲得に貢献する。〔数式などの〕象徴的表示は，この世界の事物・現実の観察・探索，およびこの世界の事物・現実への問いかけを〔一般の言語とは異なる方法で〕転記している。 世界への問いかけの授業において，簡単な実験をもとに操作・測定・計算を行うことは，科学言語（ランガージュ）を十分に使うことを意味する。的確で正確な語彙に慣れ親しむと，単純な事物・現象・実験の再現（表，簡単なグラフ，地図，図，年表など）をもとにして，結果を読解・活用・伝達できる。 体育・スポーツでは，児童自身が経験した空間と思い描いていた空間とを関連づける。例えば，オリエンテーリングの活動は，幾何学と連携する（空間および方眼上で位置を測定する，移動）。さまざまな運動競技では，寸法や大きさが使われ，長さ・時間に対するさまざまな計算が行われる。集団競技では，結果・得点の計算が行われる。

[8] 科目名は，あえて直訳に近い訳語を当てている。

[9] フランス語ではCadre européen commun de référence pour les languesの頭文字をとってCECRLとなる。ただし，英語では，Common European Framework of Reference for Languagesの頭文字をとって，略号はCEFRもしくはCEFとなる。

芸術・身体言語を使って理解・表現する

全授業科目は表現・伝達する能力の育成に貢献する。さまざまな形式の言語（ランガージュ）の手ほどきを受けることは社会的相互作用を促進する。フランス語は話しことばでのメッセージを理解し，産み出すことにつながる。芸術と音楽は作品を作り，紹介し，自身およびクラスメートの作品について意見を述べること，芸術もしくは音楽作品を比較することにつながる。さらに自身の心の動きを表現することに資する。体育・スポーツ，とりわけ芸術・美学的ねらいがある活動の展開は，運動をまね，作り出し，見せ，自身の意見を述べることによって，表現・伝達することと連携する。

領域２
学習の方法と道具

すべての授業科目は学習方法に関する技能を育成することに貢献し，その結果，学習効果を改善し，児童全員の成功を推進する。暗記課題や詩を暗唱すること，関連資料を利用すること，文章・設問指示を再読すること，参考文献を使うこと，情報探索のために図書館・図書室に通うこと，コンピューターを使うこと等は，自身の学業をより実りあるものにするために身につけるべき習慣である。協働して計画を実現するには，全科目の関与が必要である。計画に取り組むことは，グループでさまざまな道具を使いながら，協働・協力し成果物に到達する能力を育成する。すべての授業において，特に世界への問いかけでIT技術に慣れ親しむことは，情報を探索・共有し，最初の説明・論証を発展させ，批判的判断を下す能力を育成する。フランス語では，文章・資料群から情報を引き出すことにより，問いかけ・必要・好奇心に応えることができる。幾つかのソフト（スペルチェッカー付きのワープロソフト，共同執筆の装置）に慣れ親しめば，文章を書き，自身の文章を再読することができる。数学における，暗記すること，参照すべき道具を使うこと，試算すること，論証すること，確認することは，日常生活における単純な問題解決の構成要素である。現用（外国もしくは地域）語では，何語の教材なのか文化的に識別可能な印刷教材もしくはマルチメディア教材，あるいは紙媒体もしくはデジタル教材を使うことは，意見交換しようとする意欲を助成する。〔他者に〕耳を傾け，文章を作成する活動は，デジタル装置，デジタル・ネットワークによって活性化する。美術と音楽は，イメージについての学習におけるインターネット検索や，作曲・上演のための情報検索，音を出すさまざまな事物の操作から恩恵を得る。第２学習期のあらゆる授業科目において，デジタル・ツールに慣れ親しみ，使用することにより，デジタル技術によるコミュニケーション・ルールを発見し，その限界・危険を知ることができる。

領域３
人と市民の養成

道徳的・市民的・社会的価値の獲得は，すべての授業科目における具体的な状況，さまざまなテクスト・作品と向き合うことを通じて行われるが，とりわけ道徳・市民教育を通じて行われる。

この授業は相互に緊密に関連する３つの目的を目指す。すなわち，他者を尊重すること，共和国の価値を獲得し共有すること，市民意識にもとづいた教養を構築することである。この授業が目指すところは，何故，そしてどのように多大の労力を払って規則が作られるのかを理解し，その意味を習得し，学校内外の権利＝法を知ることである。偏見の事例，正義・不正義についての考察と向かい合うことにより，児童は道徳的判断に関する教養への関心を高める。議論・論証・論理的思考に基づいた問いかけを通じ，児童は自身の見解を表明し，感情を表し，批判的考察を行い，さまざまな判断を述べ，論拠づける能力を獲得する。全体的利益と個別の利益を分けることができるようになる。デジタル技術を責任をもって使うことへの関心が高まる。

授業科目，世界への問いかけにおいて，自身そして他者への約束を守ること学び，知識に基づいて道理ある態度を取り，環境・健康に対して責任ある言動を育成する。これらを通じ，児童は市民としての意識を獲得しはじめる。児童の感情・感動の表現・調整，自身のものの見方と他者のものの見方との突き合わせは，芸術活動全体およびフランス語，体育・スポーツの授業全体をもとに行われる。これらの授業は趣味と表現力を豊かにし，個人あるいはグループで作り出す作品の作成にかかわるルールとハードルを定める。また，コミュニケーションと表現にかかわる規則を守ることを教える。そして，自身と他者を尊重できるよう援助し，批判精神を磨く。これらの授業により児童は以下のことができるようになる。すなわち，自身の意見を表明すること，与えられた状況において異なる役割・資格を識別し，それを果たすこと，である。これらの授業は語彙の学習を伴う。この語彙の学習において，権利と義務，保護，自由，正義，ライシテの遵守といった概念が定義され，構築される。以下のことは判断力と自信を育成する。すなわち，是非を問うこと，合理的に議論を組み立てること，率直な予測・反論を表明すること，知ろうとしていることについて考えること，特に数学において，自身の回答の方針を述べ，かつ説明しながら問題を解いてみること，である。

現用外国語・地域語〔の学習〕は，発言が賛同，支持，そして尊重されると，自信を築く助けとなる。この授業は他者を受け入れることを可能にし，自主性の段階的な獲得を助ける。

すべての授業は，個人的なプロジェクトの実現，あるいはクラスメート，あるいは他のパートナーとの協働によるプロジェクトの実現を通じ，自発的参加，率先的行動の意識を育むことに寄与する。

領域４
自然の体系と技術の体系

世界への問いかけは問いを立て，推測を表明し，研究装置を想像し，答えを出すのに最適な授業である。生物・物質・事物の３領域から世界を細かく観察する調査方法によって，生物界の幾つかの特徴を知り，幾つかの自然現象を観察・記述し，単純な事物の機能とその働き具合を理解できるようになる。

必要に応じ，異なる推論の形式（類推・演繹・推理）が活用されはじめる。教員の指導を受けながら，児童は以下のことに挑戦する。すなわち，実験すること，採用した方法を紹介すること，測定もしくは研究結果を説明・表示・活用・発表すること，そして，正確な用語を使い，問いに対する答えを提出することである。発表は論拠に基づいており，思い込みではなく，観察と研究に依拠する。この授業科目は以下の点を育成する。すなわち，個々の知識に対する論理的態度，他者・環境・自身の健康に対する簡単な行動による責任ある態度，清潔さ・栄養摂取・睡眠に関連する衛生上の単純な規則の習得，安全に関する平易な規則の理解と実践，である。

数学において，計算し，四則計算の意味を習得し，基礎的な問題を解答することは，観察を可能にし，問いを立て答えを探す意欲をかきたて，学習した概念に意味を与え，世界のいくつかの基本的要素の理解に貢献する。

同じく美術の授業では，作品を構想・製作する際に，異なった角度から事物と物質に取り組むことができる。芸術・文化あるいは美学的分野で何らかの事物を図式化すること，あるいは技術の分野で，単純な電気回路を科学的あるいは技術的基礎知識に基づいて図式化する際には，想像力と創造力が活用される。

道徳・市民教育の授業は，学校・教室の枠組みを通じ，将来の市民の形成に十全に貢献する。自身がした約束を守ること，自主的に学びかつ協力すること，学校・教室での生活に関わること，これらは個人の責任，かつ集団の責任の基本原則をなす。

領域５ 世界観と人間の活動
美術の授業で行われる学習では，製作と鑑賞を相補的に行う必要がある。この学習により児童はさまざまな世界観を理解し始める。翻案された遺産〔文学〕そして若者向け文学の幾つかの主要作品を通じ，世界観の表現は時代と場所に応じて多様であることを理解することは，第２学習期における美術教育の仕上げとなる。この理解は以下のような場合に促進される。児童が知識・技能を駆使して，個人あるいはグループで音楽作品の製作に取り組む場合である。これらの作品・活動には，表現・美あるいは敏捷な身体運動にかかわる狙いが込められている。あるいは，児童が自身の知識と技能を活用して，課題として与えられた条件下で作品を作る場合である。児童は紋切り型の表現を操作・利用してお話を作ったり，自身の創造的経験，授業で触れた技術，そしてこれまで出会った作品から着想を得て作品製作することができる。 世界への問いかけ，数学，体育・スポーツの授業では，空間と時間の概念を実際に使用する。近隣の生活環境において自身がどこにいるのかが分かること，方角を把握すること，移動すること，近隣の生活環境をイメージすること，地上にある目印となるものを識別すること，簡単な幾何学の図形を作ること，異なる時代の美術作品を位置づけること，身体の強化あるいは美的表現を目的とした活動の際にコースを巡り，移動すること，これらは空間上の目印の定着に貢献する。時間上の目印は持続性，継続性，先行性，後続性，同時性といった概念を把握・理解する助けとなる。長い時間の中に幾つかの出来事を捉え始めること，過去あるいは私たちとは多少とも時間の隔たりのある時代の現実・出来事の存在に気づくことは，時代の流れの初歩的な理解に通じる。出来事の繰り返し，過ぎ去る時間を把握することで，周期的な時間の流れの初歩的理解ができる。とりわけ，世界への問いかけという学びの領域では，近隣そして遠隔地の環境を発見し，これらの環境を形成する空間とその主な機能を学び，幾つかの生活様式を比較し，地理的環境への対応およびその変革に関する多様な選択を関連づけることを学ぶ。これらの学びにより，所与の空間・時間の中で変遷を遂げる組織化された社会の中で，共通の文化を段階的に構築することが可能になる。現用外国語・地域語の授業では，文化の学習を通じ，他のライフスタイルを理解することができる。

第３部：授業（第２学習期）
フランス語

就学前学校において，児童は話しことばの使用にかかわる技能を伸ばし，共に話すことを学び，文章を耳にし，理解することを学び，書きことばの機能を発見し，書く練習を始めている。語彙の獲得，音韻に関する意識，アルファベットの原理の発見，言語の諸規則への注意，筆記に関する基本動作の初歩的練習により，児童はフランス語学習を進めるにあたっての道しるべを得ている。

フランス語の授業は，コミュニケーションを行い，社会で暮らすための技能を強固にする。世界との関係の基礎を作り，自意識の構築に寄与する。すべての授業，すべての言語における第一歩を容易なものにする。

小学校３年が第２学習期に統合されたことにより，すべての児童に対して読むこと，書くことにおいて，強固な基本的技能を保証できるはずである。この学習期を通じ，科目としてフランス語と明示された学習が，毎日数コマ実施される。話しことばは学校のきわめて多様な状況下で練習される。同時に，就学前学校と同様，話しことばに特化した授業が行われる。読むこと，書くこと，文法，つづり字，語彙に関する活動は毎日行われる。またこれらの活動は絶えず関連づけられる。個々の児童が素早くかつ確実に単語を識別できるようになるために，体系的な学習活動を実施する。こうした活動を通じ，児童はアルファベットの規則を習熟し，単語を暗記し，さらに磨きをかける。文章を理解するための方法・考え方は，授業の中で明示的に教えられる。

言語（ラング）の学習はフランス語の授業の中で最重要の項目である。言語（ラング）の学習は，話しことばそして書きことばにおいて表現する力の条件となり，すべての科目における成功，社会への同化を左右する。独立し，厳格で，はっきりとした授業が実施されなければならない。

発話（エノンセ）と形態の観察と操作，その分類と変形に基づいた段階的な学習法は，知識の最初の構造化に通ずる。これらの知識は次の学習期において強化される。また，特別に割りふられた授業時間において，そして多数の練習問題において使用される。同じく，これらの知識は，話しことばあるいは書きことばで表現する際に，そして読むことを通じ活用 —— 確認・強化・無意識化——される。

育成すべき技能	基盤の領域
話しことばで理解・表現する ・話しことばでのメッセージ，あるいは大人が読み上げる文章を聞いて理解する。 ・聞いてもらい，理解してもらうために発言する。 ・さまざまな状況下で話し合いに参加する。 ・産み出された言葉（ランガージュ）に批判的な距離をとる。	１，２，３

読むこと ・単語の識別がますます容易なる。 ・文章を理解する，そして自身の理解を点検する。 ・異なる読みの形を実践する。 ・音読する。	1，5
書くこと ・書き写す。 ・書き方を身につけながら文章を書く。 ・自身が書いたものを見直し，改善する。	1
言語（ランゲ）の仕組みを理解する ・話しことばから書きことばに移行する。 ・語彙を構築する。 ・語彙のつづり字の基礎を学ぶ。 ・簡単な文の構造をつかむ。 ・文法的つづり字の規則の基礎を習得する。	1，2

話しことば

話しことばの基本を習得することにより，児童は以下のようなことができるようになる。すなわち，活発に言葉のやり取りをすること，表現すること，仲間の発言・メッセージ，あるいは耳に入ってくる文章を理解しようとしながら聞くこと。視点あるいは提案を表明しながら，同意を示しながら，あるいは反論しながら応対すること，である。教員は学習期を通じあらゆる機会で児童が使う話しことばの妥当性・質に配慮する。教員は話し合いの調整者，児童に議論の仕方を教える熟練のガイドである。

話しことばの習得を推し進めるには，学習における試行錯誤を受け入れることが前提となる。この学習により個々の児童は多様で，状況に応じた，そして理解可能なスピーチができるようになる。かつ，より練り上げられた言語（ランガージュ）を獲得できる。話しことば（語ること，記述すること，説明すること，話し合いに加わること）の練習に特別に割り当てられ，その旨を明示した授業コマは，〔他の〕多様な授業科目を構成する授業コマ，および学級生活の話し合いの時間に統合さることによりさらに効果をあげる。これらの時間帯には，現実の状況下で発見される語彙の説明，暗記，再利用が行われるからである。

話しことばに関して獲得された表現・理解の技能は，書きことばをよりよく習得するうえで不可欠である。同じく，書きことばの使用に段階的に習熟すると，より形式・構成の行き届いた話しことばを使えるようになる。文章の音読・朗唱・暗誦は読んでいる文章の理解の仕上げになる。文章を暗記しておくと（特に詩，これから上演する演劇作品の抜粋），児童は今後使うことのある言語形式を獲得できるので，個人的な表現の支えとなる。

学習期末に期待される学力
・聞くとき，話し合いのときに高い注意力を維持する。また，必要がある場合は，理解していないことを適切に表明する。 ・コミュニケーションのさまざまな状況において，話の対象と話し相手を考慮して，明確な発言ができる。 ・どのような話をするのか，期待が明らかな状況では，特に物語ること，描写すること，説明することといった期待に沿ったスピーチの形式を実践できる。 ・話し合いに適切に参加（質問する，問いかけに応える，意見の一致・不一致を表明する，不足を補う，コメントを加える）する。

（大人もしくはクラスメートが発する）話しことばでのメッセージ， **あるいは大人が読み上げる文章を聞いて理解する**（読むこととの連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況・活動・道具の例**
・目的に応じて注意を維持する。 ・重要な情報を見つけ，暗記する。それらを関連づけ，意味づける。 ・メッセージあるいは文章を理解するために，参考となる必要な文化的知識を活用する。 ・文章の中で耳にした語彙を暗記する。 ・理解するうえで困難があれば，それを見つけ出す。	・大人もしくはクラスメートが発するメッセージ，あるいは指示を注意深く聞き取る。 ・朗読された文章，大人が与える説明・情報の聴取。 ・指示の繰り返し・想起・言い換え：情報・結論をまとめる。 ・文章，あるいはメッセージ聴取の際に発見した単語をまとめる。 ・理解のために活用した目印（イントネーション，キーワード，接続詞など）の明示：現用外国語・地域語の聞き取りとの関連づけが可能である。
聞いてもらい，理解してもらうために発言する，聴衆に向かって，あるいは文章を紹介するという状況を想定（読むこととの連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況・活動・道具の例**
・聞き手あるいは話し相手を考慮する。 ・聞いてもらうためのテクニックを活用する。 ・自身のスピーチの構成を整える。 ・文章を暗記する。 ・音読する。	・とりわけ文章の読誦（特に感情表現）に向けた，声の大きさ，調子，話し方，滑舌に関するゲーム。 ・姿勢，視線，ジェスチャーにかかわるゲーム。 ・読み聞かせしてもらった物語，あるいは〔自身で〕読んだ物語のまとめ。 ・授業時間中，資料の読みから導き出された結論を，その際に発見した語彙を使って紹介。 ・クラスメートに勉強の内容を紹介。 ・旅行，作品の紹介。 ・選択，視点の正当性を説明。 ・文章の暗唱，解釈。 ・音読の準備。 ・クラスメートの手元にはない文章を，練習後に音読する。 ・自身のパフォーマンスを録音・録画し視聴。

さまざまな状況下で話し合いに参加する （実際の授業時間，学級生活の意見調整）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況・活動・道具の例**
・意見交換を司る規則を守る。 ・テーマの重要性を意識し，考慮する。 ・自身の話の構成を整える。 ・暗記した語彙を使用する。	・言葉のやりとり，とりわけディベートにおいて，自身の役割が何かを認識したうえで，その役割を果たす。 ・言葉のやりとりで活用する要素（何を言いたいか，どのように言うべきか，論拠の探索と選別）を個人で，あるいは数名で準備する。
産み出した言葉（ランガージュ）に批判的距離をとる	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・クラスメートの話の中に，ことばのやり取りを司る規則を守っている箇所とそうでない箇所を見つける。 ・グループで打ち立てた明白な規則を考慮する。 ・話を聞いた後に自身の誤り・欠点などを改める。	・人前で話すことに関する成功基準をグループで作成することに参加する。 ・同じ話の言い換え。 ・さまざまな状況のもとでクラスメートが話をし，その観察・評価に児童が関与する。 ・話しを始める前のメモ作り（この方法の初めての体験）。

読みと書きことばの理解

読むことと書くことは密接に結びついた活動である。両者をうまく関連づけて運用することは，両者の効果を向上させる。両者の習得は，他の学習と連携しながら就学期間全体を通じて行われる。だが，第２学習期は決定的な期間である。

小学１年で，児童は単語を容易に解読し，その意味を無意識のうちに識別できるようになる。さらに，第２学習期の３年間を通じ，多様な文章を一人で読むことができるようになる。児童たちの年齢に応じて翻案された情報文[9]もその一つである。これらの文章を実際に読むことによって，児童は知識の裾野を広げ，文章を書く際の参考資料・モデルの数を増やし，好奇心あるいは興味の対象を増大させ，自身の考えを洗練させる。

小学１年で児童は，時間を区切って，書きことばの規則についての活動を集中的に行う。もっとも，児童は書きことばの規則に関する最初の学習を就学前学校最終学年で済ませている。ここで児童にとって重要なのは，文字あるいは一連の文字と音を結びつけることであり，書記素と音との対応関係を確立することである。これら対応関係の学習は，児童が判読可能な文・文章から出発して，次第に無意識化してゆく。読むことに関するこれらの活動は，書くことに関する活動と協同して行われ，規則的かつ系統的でなければならない。これらの活動は，学年末には無意識に単語を識別できるようになるためには不可欠の《音階練習》である。小学１年の学年末には，音と文字を無意識

[9] 情報文：文章の形態（タイプ）の一つ。確認可能な事実を述べる文章。その目的は情報を伝えることにある。

のうちに対応させることが完璧にできなければならない。

書かれた単語を識別する助けとなるのが，つづり字の規則を暗記するための勉強である。すなわち，転写，間隔をあけてのつづり字の再現，音を文字に書き写す作業である。書くことは読むことを学ぶ方法の一つであり，語彙，文法，つづり字，文章理解と関連している。さまざまな形でトレーニングを繰り返すことにより，段階的に音と文字が結びつけられるようになる。

理解はあらゆる読みの目的である。さまざまな読みの状況を経験することによって，児童は自身が追求している狙いと，活用すべき手続きは何であるかを認識できるようになる。この手続きはさまざまな機会に練習する。しかし，その方法は，教員が加わることにより常に明示される。これらの練習は，教員が読む文章の聞き取りや，単純な文章をまず説明を受けながら初見で読み，徐々に独りで読むことであったり，短い抜粋文に関する練習問題であったりする。

一つの文章をクラス全体で読むことにより，単語を識別する過程（プロセス）と文全体の意味の把握を関連づけることができる。クラス全体での読みは言い換え練習とともに行われる。これは暗黙の意味の理解の助けになると同時に，（児童に提供される文章体験の多様さを通じ）多様な分野にかかわる語彙の知識をもたらす機会となる。

音読は，読みの滑らかさ，読みの自在さを育成するにあたり最重要の活動である。この練習は幾つかのコツを必要とする。さまざまなやり方で練習することにより，音読は単語の識別と〔文章全体の〕理解の関連づけに寄与する。また，音読を通じ児童は，書きことばの統辞にさらにはっきりと触れることができる。

作品全体に頻繁に接する（読んでもらう，あるいは自身で読む，教室で読む，あるいは自由に読む）ことにより，ジャンル，シリーズ，作者などについて目安を持つことができる。小学１年から小学３年のあいだは，年に５～６作品を学習する。これらの文章は遺産文学〔littérature patrimoniale〕（絵本，小説，お伽話，寓話，詩，演劇）および若者向け文学〔littérature de jeunesse〕から選ばれる。児童に教材として与えられる作品・文章は，語学的な複雑さ，扱われているテーマ，活用すべき知識の観点から，児童の年齢に合わせる。

児童の在学期間を通じ，個人読書・余暇における読書が奨励される。何を読むかの選択は自由である。児童は自身の好みに合う本を定期的に借り出す。個人によるこれらの読書は，家庭でも話題になるであろうが，この読書経験を教室で報告する仕組みを準備する。

読むことは，言語（ラング）について獲得した基礎的な知識を試す機会であり，語彙の獲得に貢献する。文章が作り出す障壁により，文章は未知の単語について，既知の単語のつづりについて，そして，言語的形態について問い直す出発点，あるいは補助教材となる。

学習期末に期待される学力
・素早く単語を識別する：規則的な変化により派生した未知の単語を容易に解読する，頻出する単語，暗記した不規則単語〔つづりと発音が一致しない単語〕を認知する。 ・児童の成熟度と学校で学ぶ教養に適応したさまざまな文章を読み，理解する。 ・準備した後で，半ページ程度（1400字から1500字）の文章をよどみなく音読する；準備した後で，教員・教室との問答を交えた音読に参加する。 ・授業で１年間に最低５～６作品を読む。

単語の識別がますます容易になる	
関連知識と技能 書くことと連携して：音とつづりの規則に基づいた解読，言語（ランゲ）の分析と語彙	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・耳で聞いて，単語の構成要素を識別し，分析できる。	・音素の識別・区別の練習になる識別・区別の作業とゲーム。
・目にした文字を視覚的に区別できる，文字の名前，その文字が作り出す音を知っている。	・単語の書き写し，特に，すでに習ったコードの項目に基づいて構成された単語の解読（音から文字への転記）。
・文字と音韻の組み合わせ，対応関係を打ち立てる（単純音節〔１つの子音と１つの母音の組み合わせ〕・複合音節〔複数の子音と１つの母音の組み合わせ，および複数の母音の組み合わせ〕を言う）。 ・発音の規則の構成要素を暗記する。	・音とつづりの規則に関する規則的かつ頻繁な学習活動（小学１年の第１〔９・10月〕，２〔11・12月〕，３〔１・２月〕学期には特に集中的に実施）：文字と音韻の対応関係に関する《ゲーム》，特にデジタル機器を使用し，音と文字の対応関係を定着させる。さらに文字から音を連想する過程（プロセス），単語を分解・再構成する過程（プロセス）を加速する。 ・音節，それから単語の音読。
・頻出する（特に学校という状況下で）単語と不規則単語を暗記する。	・音節の聞き取り，児童が独りで文字・文を書き，教員がその場で訂正する。 ・教科書あるいは／そして教室で作成した教材，特に書くための手助けになる教材の活用。 ・毎日さまざまな書き取りを行う。

文章を理解する，そして自身の理解を点検する	
関連知識と技能 書くことと連携して	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・発音の規則に関する能力を活用できる。	**理解を伸ばすための二つの切り口** ・判読可能な文あるいは文章を児童が読む。 ・就学前学校と同様，大人による長い文章の読み聞かせ（あるいは録音の利用），ただし，より複雑な文章を読む；それから徐々に，児童が全体を判読できる文章を増やす；文章理解にたどり着く方法として，児童は話しことばで文書を解釈し，演じる。

・文章を発見し，理解するための方法を実行に移す（指導を受けながら，その後は一人で）。	**文章理解を可能にする活動の定期的実践** ・**個人活動** ・探索と理由づけ（文章中の情報にアンダーライン等）。 ・〔教材の〕文章と関連した書く活動：登場人物とその多様な呼び方の探知。
・文章を厳密に通読することができる。	・連結語〔接続詞と前置詞の総称〕の探知。 ・読みの流暢さ ・**協働活動**：教員の指導のもとに行われる話し合い，理由づけ（文章は見えないようにしておく）。
・推論することができる。	・**教員の指導のもとに行われる多様な活動**，これにより児童はよりよく文章を理解できる。 ・物語の言い換え，まとめ。 ・質問への応答。
・読書と自身の教養を関係づけることができる。	・段落の見出しづけ。 ・登場人物の特徴づけ。 ・さまざまな表象（絵，人形を使った演出，演技等）。 ・学習する文章の多様性（特に情報文）。
・以前の読書経験（個人的な読書との関連），実際の体験，体験から得た知識（書物の世界・典型的な登場人物に対する）を活用することができる。	・文章を読んだり聞いたりすることは，文脈の中で語彙を学ぶ助けとなる：語の代入・変形・削除；語源の初歩的学習。 ・言い換え。
・文章が喚起する世界についての語彙場を活用することができる。	・さまざまな聞き取りにおける知識の活用。
自身の理解を点検できる ・文章に基づいて，あるいは他の知識を活用して自身の解釈，答えを根拠づけることができる。 ・自身の困難を表明できる，その理由について大まかに分析ができる，援助を求めることができる。 ・活動的かつ反省的な態度を維持できる，ぶれることなく目標を目指すことができる（理解，読みの狙い）。	・理解へのトレーニング，〔文章〕理解のための戦略を学ぶことを明示したうえで学習。 ・答えの根拠づけ（解釈，見つけられた情報等），答えを導いた戦略の比較検討。

異なる読みの形態を実践する	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・さまざまな目標を目指して読むことができる ・何かを実現するために読む。 ・何かについての情報を発見するため，あるいはその正しさを認証するために読む。 ・物語を理解し，自身で語るために読む。 ・語彙を増やすために読む。 ・読む楽しみのために読む。	読みの状況の多様性 ・機能的な読み，特に学校生活に関連する文章が対象：時間割，指示，問題文，構造化された知識の痕跡を保つ道具〔検索サイトなど〕，校則等，また，レシピ，さまざまな組み立て説明書等。 ・資料の読み：教科書，ある分野に特化した本，児童の年齢に合わせ翻案されている百科事典，文章以外の表現形態〔図表，イラストなど〕を備えた文章，デジタル媒体等。 ・フィクションや多様なジャンルの文章：抜粋と作品全体。 ・図書館に頻繁に通う。 ・楽しみのための読書を促進し，価値づける：読みおわった本についての話し合い；読書日記をつける，あるいは個人ノートを取る――家族との連携の確立。 ・教室内で意見を交わす道具としての読書：教室外では〔読書を通じ〕年少の児童，年上の人々と話し合う。
音読する	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
（話しことばと連携して） ・〔つづりと音の関係を〕解読し，文章を理解する。 ・句読点を識別し，考慮する。 ・表現を込めて読むことにより，自身の理解を示す。	・読みの速さ，なめらかさの育成を目指す授業，読みの表現性についての授業とは区別すること。 ・音読の時間，個人によるにせよクラス全体によるにせよ（学習期のいつ頃か，そして文章の性質による）文章全体を見渡した後でしか行わない。 ・定期的な音読のトレーニング。 ・二人，あるいは同レベルの児童を集めた少人数グループでのトレーニング（読む，聞く，上達を手助けする等）。 ・録音（聞く，自身の読みの上達）。 ・さまざまなジャンルの文章を使った，多様な方法（個人で，あるいは数名で）による頻繁かつ定期的な音読練習，他の練習（暗唱，文学的文章の解釈）と組み合わせて実施。

書くこと

構成がしっかりしており，テーマが明示され，段階的で，かつフランス語教育の他のすべての構成要素と連携した授業，すなわち話しことばによる表現，読むこと，文法，語彙と連携した授業により，児童は比較的自然な文章が書ける手段を獲得する。

書き写すことを学ぶ

児童は就学前学校最終学年において筆記体で書くこと学び始めている。その後児童は，まだ完璧とはいえない書く動作の仕上げをし，習得した能力を改善し，文字の規則正しい筆記が徐々に無意識のうちにできるようになる。

学年がどうであれ，文章を書くという状況が頻繁かつ定期的であること，多様な文章をたくさん書くことが，上達の担保となる。書き写し活動の狙いは，児童に書く動作に慣れさせ，書き記す単語のつづりの暗記を助けることにある。第２学習期の初期段階では，書くことに関するあらゆる活動は時間をとることを理由に，毎日充分な時間を充てないということがあってはならない。

児童はワープロの簡単な機能を使えるようになる。彼らはキーボードを操作する。手書きによるにせよ，デジタル機器を使用するにせよ，児童はさまざまな媒体（本，図表，ポスター等）からレイアウトに注意しながらミスなく書き写すこと，あるいは転写することができるようになる。正しく筆写が行われることへの要求が高いのは，筆写されたメッセージや文章が〔授業で〕実際に使われるからである。

作文は読みの学習と関連付けられる。読むことができなければ書き始められないわけではない。教師は，就学前学校で育まれた学力，とりわけ単語を書く試みで育まれた学力に依拠するからである。

学びが提供する状況の多様性に応じて，児童が書く文章も多様になる。基本学習期を通して，系統的で，明示的かつ継続的な〔作文〕指導を，読むこと・言語の学習と関連づけて行うことが児童を進歩へと導く。一方で，書く練習を行う学習活動により，作文はよりすぐれたものになることだろう。児童には作文の課題が日々課せられる。質問の答えを文に書くこと，質問の文章化，文章の一部あるいは文章全体の作成などである。教師の支援を受けながら，児童は文章の特徴とその狙いを設定する。児童はさまざまなジャンルの文章を書くことを学ぶ。教員の好意的な眼差しの下，児童は書くことを楽しむ。書く作業を行うにあたり，児童は自身が読んだ文章に依拠し，かつ，自分の作文を豊かにするための材料を収集する。それらの材料とは，語彙，テーマ，構成の仕方，書き写すべき文章，変化（ヴァリエーション）を加え・敷延し・模倣すべきモデルである。児童は尊重すべき，あるいは換骨奪胎すべきモデルを自分のものにする。教師の助けを借り，児童は読者のことを考慮する。作文トレーニングの練習によって，児童が無意識のうちに行う運動は広がり，それが児童を進歩へと導く。作文においてまだ十分に自律性を獲得していない児童については，教員が児童の話を書き写す。

児童は自身が書いた文章を読み直し，改善することに慣れてゆく。この複雑な活動は，読みの経験と教員の指導のもと，教室で文章を改善したことがあるという経験を前提とする。最初に書かれた文章に対して常に好意的な指摘を行うことと，文章についてクラスメートと意見を交わすことは，児童が自律性を築く効果的な支えとなる。

援助の求めに応える教師に支えられると，児童は〔作文と〕言語（ラング）の勉強を関連づけることで，つづり字により一層気をつけるようになる。

学習期末に期待される学力
・読みやすい書体で10行程度の文章を，レイアウト，句読点，つづりを守りかつ全体の体裁に気を配りながら，清書する，もしくは書き写す。 ・一貫し，構成が整い，句読点が打たれ，文章の狙いと文章の受け手の観点からして妥当な半ページの文章を書く。 ・指示に従って，文章，特につづり字を改善する。

書き写す（読むこととの連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・ますます早くかつ正確に筆記体で書く動作を習得する。	・就学前学校での学力（確かさとスピード）を完成させるための活動。教員の明示的な指導による，無意識のうちに文字の線が正しく書けるためのトレーニング
・さまざまな字体に替えて文章を書き写す（活字体→筆記体）。	・さまざまな書き写し：能動的書き写し〔手本となる文・語句を暗記して行う書き写し〕，裏返し書き写し〔手本を見ない書き写し〕，裏面書き写し〔裏返した手本を見る回数を数えて行う書き写し〕。
・書き写す作戦を立てて，一文字ずつ書き写すだけの書き写しからレベルアップする：〔文章理解のための〕手がかりの把握，単語もしくは語句の暗記。	・つづり字および語彙と連携して：書き写しによる単語の暗記：手本を見ない書き写し，および書き写しのやり方を児童が言語化する。
・課題として与えられた文章のレイアウトを尊重する（保護者宛の依頼・お知らせ；授業のレジュメ；暗記すべき詩や歌；個人的な文章選（アンソロジー）等）	・さまざまな状況下での書き写し，レイアウトの作業：保護者宛の依頼・お知らせ；諸活動のまとめ；参照資料；授業のレジュメ；暗記すべき詩や歌等。
・つづり字があっていることを確認するために再読する	
・短い文書のレイアウトのためにワープロソフトを操作する	

書き方を身につけながら文章を書き始める （読むこと，話しことば，言語の学習との連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・さまざまなジャンルあるいは文章の形態に固有の特徴を識別する。 ・方法に従って文章を書く：アイデアを見つけ，編成する，一貫して繋がる文章を考え出す，文章を書いてみる（段階的な書き方：最初は指導を受けながら，その後は自律的に）。 ・言語（ランゲ）についての知識を獲得する：単語のつづりの暗記，〔性・数の〕一致の規則，句読点，スピーチの組織する語句。 ・教室で使える，言語（ランゲ）の学習に関するツールの活用。	・短い文章 短い文書とは，目的が明確な状況で書かれた，1～5行からなる児童個人の文章である。意味があり，完結した文書である。短い文書はより長い文書の一部であってもよい。 ・授業時間に組み込まれ，あらゆる科目に関連する日常的学習状況：質問に対する答えを一文で書く，質問をする，文章の一部あるいは文章全体を考え出す，実験あるいは議論の結論を執筆する，読書後に意見・見解を表明する。 ・無意識のうちできるようになるため，書く活動を頻繁に行う：今日の一文等。 ・多様な媒体を出発点にして書く（文章の冒頭部の続きを書く，文章の意味を変える，写真にキャプションを入れる等）。 ・これから書く文章に期待される特徴を共同で探す：おとぎ話，絵本，物語（レシ）（説話的文章），手紙，詩的文章，議論（論説的文章），実験の報告，ポスター（情報的文章），レシピ，遊びの規則（命令的文章）等。 ・《下書き》あるいは，理解を助けるメモ（図，表等）を実際に書く。 ・言語（ランゲ）の機能の仕方について系統的に考察する ・〔課題に〕個人で取り組む場合と，二人で取り組む場合とで，方法に変化をつける（互いに動機付けし合う，助け合い等）。 ・自身の書き方をクラスメートに説明する。 ・より難度が高く，あまり頻繁には行われない計画の一環をなす長い文章。受け手が教師ではなく，計画に関連する読者である文章を書く。このような計画（電子書籍，詩や短編小説のコンクール，学級新聞）を長期的に準備することよって，児童たちを最終目標に向かって一つにまとめる。

自身が書いたものを見直し，改善する（言語の学習との連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・書かれた文章の不備（書き落とし，一貫性の欠如，無駄な繰り返し）を見つけ，自身の書いたものを改善する。 ・書くべき文章のジャンル・言語（ラング）についての知識を活用する。 ・つづり字に注意を働かせる，そして文法の授業の際に習得した事柄を，まず教師が指摘した点について適用し，さらに次第に幅広く適用する。 ・校正支援ツールを使用する：授業中に作成したツール，読み直し用ガイド。	・文法の授業と連携したトレーニングと〔言語〕操作の活動。文章に手を入れることに慣れることが狙いである：文の内容補充，代名詞の使用による繰り返しの回避，文章の要素の変更・追加。まず全体で行い（言い回しについて議論し，言い回しを変え，その方法を言語化できるようにするため），次第に個人で行う。 ・主語の性・数を変えて，あるいは活用の時制を変えて書き換える練習。 ・同一の指示に従って書かれた文章の比較。 ・教員，文章を書いた児童自身，あるいはクラスメートが音読し，文章を読み直す。 ・的を絞って文章を読み直し，授業で学習したつづり字，文法あるいは語彙の一点に絞って手を入れる。 ・書くべき文書に適合した読み直し用手引きの作成。 ・一度文章を訂正した後で，スペルチェッカーを使ってミスを見つけ出す。

言語（ラング）の学習（文法，つづり字，語彙）

第２学習期における言語の学習の最重要目標は，読むこと，書くことと連携している。獲得された知識によって，理解とつづり字の問題に対応することができる。第２学習期からすでに，言語の授業は計画的かつ段階的に実施される。文法と語彙は，特これらの領域に割かれた定期的な授業で教えられなければならない（文法的概念，単語，その意味，さらに場合によっては児童による単語の歴史の発見）。これらの授業において，児童は次第に文の観察ができるようになり，文の構造が見い出せるようになる。児童は言語の仕組みを意識し，その基本的概念を理解する。

言語の学習は，念入りに構築された文集（コーパス）から選ばれた，話しことばそして書きことばによる発話（エノンセ）の観察・操作に基づく。学んだことを組織化し，規則を定式化するには，これらの活動から出発するのが適当である。最終段階では，獲得した技能を無意識に発揮し，暗記する。一般的な言語の使用において不規則な現象が頻繁に起こる場合，それらは暗記されなければならない。

文集（コーパス）の他に，読みの教材に使われる文章や作文を書く計画も，習得内容を思い出し，まだ学んでいない言語上の事実（つづりに関するもの，語彙に関するもの，形態統辞に関するもの，統辞構造に関するもの）を観察する媒体になる。あらゆる授業で，教員は単語あるいは語句・文といった言語形式に対し一定の注意深さを示す〔児童からの〕指摘を，興味をもって受け入れる。

知識は，読むこと，書くことの学習において規則正しくかつ反復的に行われる練習によって強化される。段階的に〔獲得が〕確認された学力が時間を経て維持され，無意識化され，清書や聞き取りの練習問題によって強化されるには，記憶が維持されることが必要である。習慣化された学習活動は文言について論理的に考える力，次第に無意識化される〔文法〕規則を応用する力を定着させ，育成する。

学習期末に期待される学力
・もっとも頻繁に出てくる単語（特に学校生活という状況下）と不変化語をつづる。 ・名詞句での一致（限定詞，名詞，形容詞），そして動詞と主語の一致（単純な場合：主語が動詞に先行している，あるいは主語が動詞の近くにある：主語は多くとも形容詞を一つ含む名詞句からなる）を行うために論理的に考える。 ・言語についての知識を駆使し，よりよく話しことばで表現し，単語，文章をよりよく理解し，書いた文章を改善する。

話しことばから書きことばに移行する（読むこととの連携）	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
知っていること ・つづり字と音声の対応関係。 ・いくつかの文字のコンテクストによる音声価値(s-c-g)。 ・後続の文字による書記素の構成（an/am，en/em，on/om，in/im）。	・言語事実の観察・操作を定期的に実施する。 ・単語リストを作成する。 ・音節と単語の書き取りを日常的に行う。 ・これまでに学んだことを暗記し，習得したことを無意識に行えるようにするための，繰り返しと反復の習慣化。
語彙を構築する	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・授業で行われる読み・活動に応じて単語を活用し，よりよく話し，理解し，書く。 ・同義語，反意語，同じ語族に属する単語を見つけることができる。ただし，これらの概念は学習の対象としない。 ・くだけた，一般的な，高尚なといったことばのレベルを感知する。 ・紙媒体あるいは電子媒体の辞書を引き，ある項目の中から自分に必要な情報を見つけることができる。	・教員が選択した例，あるいは読み終えた文章中にある例を対象に〔言語の〕観察を行う。 ・カード，ノート，壁用ポスターの作成。 ・語彙（教養）を豊かにし，楽しさを実感・育成できる活動を頻繁に実施する：単語，その特異性，音，書記法，語形成の発見。 ・接頭辞，接尾辞を操作して単語を作る遊び。 ・文章の暗唱・再学習を通して単語を暗記。
単語のつづりの初歩を身につける	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・もっとも頻繁に使われる語彙のつづりを暗記する。 ・学校での活動，科目に関する語彙。 ・児童にとって親近感のある世界の語彙：家庭，家族，日常生活，遊び，感覚，感情。 ・主な不変語を暗記する。 ・単語を系列（語族，形態上の類似から関連する単語）に従ってまとめることができる。	・他のすべての授業科目における学習と連携した活動。 ・さまざまな基準に従って単語を探し，選別し，分析する活動：語彙場，語族，形態上の類似，不変化語。 ・単語のつづりを言う。 ・単語・文・短い文章（２行から５行）の書き写し活動の習慣化。 ・つづりを暗記するための練習・再学習。

簡単な文の構造をつかむ	
関連知識と技能	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例**
・文を識別し，その主要構成要素を分別し，分類する。 ・文の主要構成要素を認知する。 ・主語。 ・動詞（動詞の識別ができるためにその特徴を知る）。 ・補語。 ・主要品詞を区別する。 ・名詞。 ・定冠詞，不定冠詞。 ・形容詞。 ・動詞。 ・主語人称代名詞。 ・不変語。 ・名詞グループを認知する。 ・平叙文，疑問文，命令文の３種類の文を認知する。 ・否定形，感嘆形を認知する，変形を実行できる。 ・文末の句読点（！？）と，引用記号（« »）使う。 ・つづり字，書くこと，読むことに関する問題を解決するために《文法用語》を活用することができる。	・単文を識別するための慣例化された学習活動，以下の点を重視する。 ・句読法：ピリオドと大文字。 ・問い：何について語っているか。それについて何を語っているか。 ・意味のまとまりを把握するための音読。 ・文の構造をつかむために文・句を操作，選別，分類する活動。 ・書く活動，ゲームを通じ，品詞を識別し，名詞句・単文を組み立て，目的補語・状況補語を変化させる。 ・話しことばと書きことばでの，練習問題と再学習を定期的に繰り返すことにより，習得中のメカニズムを無意識に使えるようにする。

文法的つづり字の規則の基礎を習得する	
関連知識と技能 **理解する** ・文中の名詞句の仕組み。 ・名詞／形容詞を区別するための《一致の連鎖》の概念（単数／複数；男性／女性）。 **使う** ・名詞，品質形容詞の一致の印：数（-s）と性（-e）。 ・他の複数形（-ail / -aux ; -al / aux …）。 ・名詞（lecteur / lectrice …），形容詞（joyeux / joyeuse …）において音でわかる女性形の印。 ・主語と動詞の関係を識別する（単純な状況下で識別）。 ・語幹と語尾を識別する。 ・活用された動詞の不定形を見つける。 ・以下の動詞の現在形，半過去形，未来形，複合過去形を暗記する。 ・動詞 être と avoir。 ・第1群動詞。 ・第3群不規則動詞（faire, aller, dire, venir, pouvoir, voir, vouloir, prendre）。 ・単純時制と複合時制を区別する。	**児童にとっての状況設定・活動・道具の例** ・習慣化された活動：規則に適合した例（一致，活用）をもとに，規則の観察，操作，構造化，定式化を行う。 ・個人もしくは全体でツールを作成する：年間を通じて完成させるカード，掲示物等。 ・収集した例について話し合いや討論をし，つづり字に対する意識を構築する。 ・書く活動を通じ，文法とつづり字の授業を継続する。 ・聞き取りを日常的に実施：聞き取りにより，論理的省察，つづり字への注意だけに集中することができる。また，教師が特定し，指示した個々の技能に集中して学習できる。 ・多様な形態の書き取り：自己書き取り〔あらかじめ暗記した文章を再び聞き取って書き取る〕，単語，文を抜いた予習書き取り〔書き取りの文章，もしくはポイントをあらかじめ学習して行う書き取り〕，議論を伴う書き取り等。 ・二人組あるいは数名のグループで意見交換をしながらの採点（答案の理由を説明）。 ・時制の置き換えの活動。 ・《〔動詞〕活用表》の段階的作成。 ・つづり字の問題を解き，なぜそのような選択をしたのか，理由を説明する機会を設定する。

すべての授業の交差点

言語（ランゲ）の使用は，あらゆる授業，そして学校生活のいかなる瞬間にも欠かせない。繰り返しにより，言語の使用にはあらゆるトレーニングが可能である。話しことば，読むこと，書くことという活動は，日々の授業全体に取り入れられる。

話しことばは，話し合い，（文章やイメージついての）討論，報告・紹介，規則を定めて行う議論（道徳・市民教育との連携）の中で育成することができる。話しことばは体育・スポーツでも練習できる。実行した運動を描写し，仲間と意見を交わすには適切かつ正確な語彙が必要だからである。

あらゆる授業，あるいは学びは読むこと，書くことの機会となる。読むことでは，教材は連続した文章でも，文章とさし絵を組み合わせた資料でも構わない。また，教材の媒体は従来からのもの

であろうと，デジタルのものであろうと構わない。書くことについては，少なくとも１日に１コマは書きことば（発表の準備と作文）にあてられるべきである。

現用外国語の学習は，当該外国語の言語の仕組みをフランス語の仕組みと比較する機会となる。また同時にフランス語でも有用な技量（聞いて理解する，単語を比較して意味を推量する等）を明確にする機会でもある。

学習期の３年間，継続的かつ野心的なプロジェクトを通じ，読むことと話しことばそして／あるいは書きことばでの表現，美術そして／あるいは他の授業科目を連携させることができる。例えば，本を執筆・製本し，さし絵をつけるプロジェクト，フランス語あるいは学習中の言語を使って（語り，あるいは歌による）文章を音声化するプロジェクト，校外見学あるいは修学旅行（例えば，授業科目「世界への問いかけ」と連携して，近隣の環境の発見を目的に実施）の報告（ポスター，解説付きの展示等の形で），資料調査が考えられる。